


グローバルウィークⅡ　宮古訪問振り返り

# ともしび
# 共生委員会ニュース

2018 年度　４号

2018 年１１月１１日版

## 2018 年度 SGH 成果報告会開催

2018 年度 SGH 成果報告会が、１２月１日（土）、１３：３０より PS 講堂にて開かれます。

普段の授業、グローバルウィークなどのイベント、スタディツアー、平和共生論文など様々な場面で高等部生活に取り入れられている「スーパーグローバルハイスクール」としての取り組みを振り返ります。

今年度は以下の内容が中心になります。

①スタディツアー報告（宮古／東ティモール／フィリピン訪問プログラム参加者）

②平和共生論文代表生徒発表（303 Nさん、307 Nさん、309 Oさん、310 Kさん）

③全国高校生フォーラム向けのポスターセッション

④生徒による英語パネルトーク

⑤アフタートーク

外部からもゲストをお招きして、高等部ならではの意欲的な取り組みに触れていただきます。多くの方のご参加をお待ちしています。




昨年度「SGH 成果報告会」の様子

# 平和共生論文執筆体験談

上智大学外国語学部ドイツ語学科２年　K.M.

みなさん、初めまして。６５期卒業生(現大学２年生)のKです。論文執筆からあっという間に２年過ぎ、今はドイツのミュンヘン大学に留学しています。

大学生になって、「自分でアイデアを持つこと」「自分の考えを表現すること」「正答のない問いに向き合うこと」の大切さを感じています。大学の「専攻」は法や経済といった大きな分野ではなくて、もっともっと狭いフィールドです。平和共生論文も大学の専攻と一緒で、小さいけれど奥が深い問いが大事だと思います。

思い返してみると、平和共生論文の論文執筆は大学生活に似ています。論文の問いにも、大学生活にも「〇〇をしたらOK！」という正解はありません。どんな授業を履修するか、何を勉強するか、何に時間を費やすか、自由に決められることが多い分、大学生活のレールは自分でつくります。どんなレールにしたいのかという自分のアイデアがなければ、設計図は描けません。

大学の課題のレポートは、自分で参考にする資料を探すので、平和共生論文の執筆で参考文献の書き方や論文の検索の仕方を知っておいて本当に良かったな！と、つくづく思います。「書き方を知っている」みなさんは大学生活のスタートダッシュが有利ですよ！

とはいっても、「論文の問いって何にすればいいか分からない」ですよね。大きなことを成し遂げようと背伸びをする必要は全くなくて、自分のちょっとした疑問でも、実はみんなが共通して思うことだったり、ものすごい先行研究があったりします。

私は、最終論文の加筆修正中、プチ評論家的な視点で何度も自分の論文に修正を入れていくことが精神的にも体力的にも本当に大変でした。その経験のおかげで「私にとって『やりたい勉強＝専攻』と『得意な教科』は違うこと」を実感できました。完成したときの達成感は本当に格別で、「私は書けるぞ」という自信にもつながりました。

その論文をもう一度読むのは正直少し恥ずかしい気もしますが、今では高校３年生の「私」の考え方が分かる大切な記録になりました。卒業アルバムや卒業証書と同じように、平和共生論文もみなさんの高等部生活を表す素敵なものになることを願っています！



# 東ティモール訪問プログラム

HR304　Y.K.

《レテフォホ　小学校訪問》

レテフォホで迎えた初めての朝は少し息苦しかった。標高が高く、酸素が薄かったからだろうと思う。朝食を終えた私達は車に乗り、軽いジェットコースターコースの様な坂、隣は崖、という道を通り、地元の小学校へと向かった。

車から降りて辺りを見渡すと子供達がいた。私達は日本から持ち込んだ「かるた」を出した。このかるたは渡航前に私達が制作した物で、無地のかるたにイラストを描き、読み札に日本語、英語、テトゥン語での読み方を記載した、東ティモールバージョンだ。早速、地面に絵札を広げて実演して見せた。見ていた子供達はすぐにルールを理解し、次々と絵札の周りにしゃがみこみ、かるたで遊ぶようになった。

帰るときには子供達も大人達も皆最後まで手を振ってくれていて、私は最後までその姿を見続けた。何よりも記憶に残っているのは彼等が東ティモールの国歌を歌ってくれたことだった。帰国してから、動画サイトにて日本語訳付きの東ティモールの国歌を聴いてみたら、自由、土地、国を大事にする歌詞にとても感動した。この感動は一週間を東ティモールで過ごしたからこそのものであると思う。

私が東ティモールのことを好きになったのは、現地の人々の優しさや親しみに触れたからかもしれない。東ティモールは過去に外国によって被害を受けたことがあったにも関わらず、なぜこのような穏やかな性格を持っているのだろうかと思った。私は人々のことをただ見るだけでなく、“知る”ために、より一層東ティモールの人々に近付きたいと自然に思った。これで私がどうして帰国時にティモールっ子になっていたのか、わかってもらえたのではないだろうか。もしまだ理解できなければ、是非一度東ティモールを訪れて欲しい。美しい景色、活気のある市場、そして素晴らしい人々に出会う事で、きっとこの理由がわかるはずだ。

（SGH プログラム　東ティモール訪問プログラム報告書より抜粋）



# フードドライブのご案内

Aoyama Second Chance

私たち Aoyama Second Chance (ASC) は日本の食料問題について考え、少しでも解決に近づけられるよう取り組んでいる団体です。ところで、皆さんは日本で食料問題が起こっていることをご存じですか。実際に、日本は食品ロス（本来食べられるにも関わらず捨てられてしまっている食料）の問題を抱えているのです。年間の米の生産量約 800 万トンとほぼ同じ割合の食品ロスがあると言われています。このように、日本の食料問題はとても深刻です。

そこで私たち ASC は、まだ食べられるのに様々な理由で処分されてしまう食品を食べ物に困っている施設や人々にお届けする活動（フードバンク）によって、食料の余剰と不足のギャップを埋める役割を担っています。また、私たちは「セカンドハーベストジャパン」という日本で初めてフードバンクを始めた団体の活動を参考に、日々食料問題に取り組んでいます。

主な活動として、家庭から寄付できる加工食品を学校で集めたり（この活動をフードドライブと呼んでいます）、任意で学校外のボランティアに参加したりしています。一見小さな活動のように見えますが、確実に誰かの役に立っているとメンバー一人一人が実感しています。もし、これを読んで少しでも興味が湧いたのであれば、ぜひ ASC に参加しませんか。私たち ASC は新メンバーをいつでも募集しています。

最後にお願いがあります。11/27(火)から 11/30(金)、1 階エントランス正面階段付近で食品の寄付を募ります。野菜や魚の缶詰・フリーズドライ食品・インスタント食品・レトルト食品・調味料・米・パスタ・ペットボトル飲料など、お家にあれば余っている分を寄付してくれると嬉しいです。いずれも 2019 年 3 月以降の賞味期限のものでお願いします。これらの寄付は全て食料不足で苦しむ人たちの支えとなり助けとなります。よろしくお願いします。

